

森山英子さん

1930(昭和5)年8月20日生まれ

民間人

所属 県立第二高等女学校

場所 糸洲、米須(ともに現糸満市)



●1946(昭和21)年1月下旬 名護の収容所から糸洲(現糸満市)に送られる

汀間(ていま、現名護市)の収容所から各市町村に帰ることになったですよ。最初は東海岸から返すんですよ。西海岸は返さないです。

トラックに載せられた、自分のところに帰らなかったらどうすると兄が言って。ホロを被せられて、どこにいくかわからない。下ろされたのが、糸洲というところですよ。ちゃんとしたテントもあったんです。

初めて泣いたんです。なぜ泣いたか。砂地に段ボールを引いて、眠るときには足をまげて、交互に眠るんです。下は土。土で眠れないから段ボールを引いて、ちょうど1月くらいです。1月下旬に先発隊として行きました。

●1946(昭和21)年2月より 遺骨収集にあたる

折角女学校に入って、学問をつけないといけない。糸満高校に通っていたんです。その周囲はアメリカのテントがいっぱいあったんです。強姦事件とかもあったんです。2時間くらいは勉強なんです。机もない、紙もない、先生が頭に覚えていることを聞くだけ。2時間終わったら、トウモロコシの袋を持って、授業が終わったら骨拾いなんです。

糸洲なんか、着物が見える、頭が腐れないで、骸骨で毛だけ生えている。火炎放射機で焼かれたサウキビ畑は、新しい芽が出ているの。ひもじいでしょう。学校帰りがけはひもじいでしょう。畑に入るんです。サウキビを食べるの。着物が出てきたり、印鑑、万年筆が転がっている。それ気にせず食べるの。水芋(サウイモの一種)って知っていますか? 母親が探すの。いっぱい草が茂っているところは、人が埋まっている。壕の大きな水、川、戦争中は血の海だった、それを汲んで飲むの。

夜になると、火の玉、リンが燃えると火の玉になるの。夜のトイレは行きたくない、火の玉が見えるから。あちこちで死んでいるから、昼は見えないけど、リンが燃えるの。東北大震災の気持ちもわかります。大通りはアメリカ軍が片付けている。周囲は全然片付けていない。遺骨がたくさんあるの。木端微塵になった船がいっぱいいる。トラクターで寄せているの。一歩外れれば死体。でも怖いのは地雷。先生たちが、ここは入っちゃいけないと言う。爆発はよくあったの。

遺体そのまま埋まっているの。ひめゆりの塔の入り口でね、こんなしているの(万歳をして転がっている)。人間の皮がせんべいみたいになる。木の枝でたたくと、崩れるんです。男の人たちが担架に乗せて、丁寧に扱って、安置するの。魂魄(こんぱく)の塔(右写真)を作っていますよね、金城先生(当時真和志村長、金城和信氏)が中心になって。どこで亡くなったかわからない人は、みんな来ているの。アメリカ人だろうが、日本人だろうが、民間人、軍人関係なしにね。

次は健児の塔(沖縄師範学校男子部の鉄血勤皇隊を祀る)。入っていけない区域だったの。許可を得て、たった2日間許可を得て入った。大きな岩があって。降りるのすら大変。降りていたら、皆いるのは生徒なの。顔の姿がそのまま残っている。まだ不発弾、地雷がある。引き上げになったの。頭だけをきちんと並べなさいと。もう、忘れられない。

(取材日:2012年2月5日)



※魂魄(こんぱく)の塔は沖縄で戦後最も早く作られた碑である。以下碑文より抜粋。

戦後、真和志村民が収容移住を許された所で村民及び地域住民の協力によって、道路、畑の中、周辺いたる所に散乱していた遺骨を集めて祀ったのがこの魂魄の塔である。

祭神三万五千余柱という、沖縄で一番多く祀った無名戦士の塔であった。(後略)